

春日大社へと続く道、奈良市の三条通り沿いに、創業170余年、日本でただ一軒、奈良団扇をつくり続ける「池田含香堂」がある。「約1300年前に中国から伝わり、日本で初めてうちわがつくられたのが、奈良の春日大社なんですよ」と6代目の池田匡志さん。「当時のうちわは、扇ぐためのものではなく、神事で使用したり、高い神職の位を示す道具でした。」「うちわ」という言葉は、神事で邪悪を「打ち払う」ことに由来するともいわれる。

江戸時代に入ると、うちわは風をおこす道具として庶民に広まっていった。「当初の柿洪を塗った黒や茶色の無骨なうちわから、江戸初期には、鮮やかな色の和紙を使い、透かし彫りを施したうちわが奈良団扇という言葉とともに登場したようです」ところが江戸中期になると、そうした美しいうちわは一旦、途絶えてしまう。「明治時代に入って、池田含香堂の2代目・池田栄三郎が透かし彫りに使った道具などを発見したことをきっかけに、研究を重ね、現在の奈良団扇につながる特徴を持つうちわを確立しました」

奈良団扇の特徴は、まずは見た目の美しさ。赤、黄、水色、白、茶という陰陽五行の流れをくむ5色の鮮やかな色彩の和紙に、鹿など奈良にちなんだ模様、鳳凰や花といった模様などが、繊細な透かし彫りで施されている。もうひとつの特徴が実用性。美しいからといって飾りうちわではなく、軽く扇ぐだけで涼やかな風がしっかりと起こる使い心地のよいうちわだ。

奈良団扇の高い実用性を生みだしているのが、竹製の骨。奈良団扇の骨は、一般的なうちわの骨と比べて1本1本が圧倒的に細く、薄い。さらに骨の数が一般的なものでは約30本であるのに対し、約60〜80本も配されている。「この細くて薄い骨が、やわらかくしなる



※奈良団扇職人

ただし

池田匡志さん



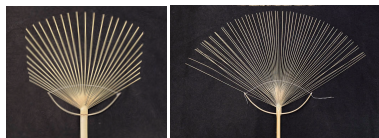
1980年、嘉永年間創業の池田含香堂の次男として生まれる。大学卒業後、6代目就任。幼いころから作業場が遊び場で、奈良団扇づくりはかっこいいなと思って育ちました。奈良の人でも奈良団扇を知らない人いると気づき、多くの人奈良団扇を知ってほしいという気持ちで僕の原動力になっています。経済産業省「New Wonder 500」認定。奈良伝統工芸士・大賞受賞。



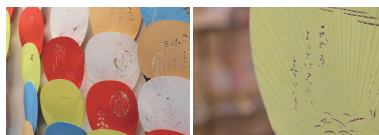
鳳凰が描かれた「天平文様」の型紙写の和紙写（写真左）。和紙に墨で模様を転写して作業に入る。池田含香堂でつくられる奈良団扇の7割のデザインは2代目栄三郎氏によるもので、残りの3割を毎年当主が新たなデザインをつくり足している。



超絶技法の透かし彫りを施した「流水」型と名付けた池田さんの作品。こうした作品は飾り用としてつくられるが、扇げばいい風がくる。



一般的なうちわの骨（写真左）と比べると、圧倒的に細く、薄く、骨数の多い奈良団扇の骨（写真右）が、扇いだ時の“しなり”を生む。一般的なうちわの重さを想像して奈良団扇を手にとると、その軽さにびっくりする。



赤、黄、水色、白、茶の鮮やかな色彩が目を引く。かつては奈良市内に8軒ほどの奈良団扇の店があったが、戦時中に池田含香堂を残してなくなった。



池田含香堂
奈良市角振町16
TEL 0742-22-3690

ことで、しっかりといい風を起すんです」
1本の奈良団扇は、1年をかけてつくられる。冬場は、竹の骨づくりを行う。「竹はよく伸びる植物なので、成長の遅い冬に伐採した身の詰まった丈夫な竹だけを使います」。特に寒い1・2月には、扇面に貼る和紙の色染めをする。「染料には、呉汁と呼ばれる大豆の絞り汁や膠、貝殻の粉である胡粉など天然の材料を多く使うため、気温も湿度も低い季節に染めると発色がいいんです」。池田さんは、和紙を「染める」と表現するが、丸バケと呼ぶバケで1枚1枚の和紙に色を、塗る「ように染める」。「横・縦・斜めと何回も丸バケで染めて、手染め感を残しつつ、美しく染めていきます」。暖かくなる4月頃からは骨と和紙の糊付けをして、団扇を完成させていく。糊付けには水分量の少ない米100%の糊を使うことで、和紙が伸びたりよれたりしない。「奈良団扇は丈夫で、30年ほど使っていたり方もいらっしやいます。たとえば化学製品のセロハンテープなら数年ではがれてきますよね。でも、天然の材料でつくった奈良団扇は、経年劣化が緩やかでとても長持ちするんです」

点をつなぎ合わせるように彫る、突き彫り

取材当日は、通年、作業を行うという透かし彫りの様子を見せていただいた。染め上げた和紙を奈良団扇10本分20枚を束ね、まず、和紙の上に型紙を置いて墨で模様を写す。そうして、手製の刃物を模様に対してほぼ垂直に突き刺すようにして彫っていく。「突き彫り」という技法で、点をいくつもつなぎ合せて彫っていく感覚です。カッターで引く張るように曲線を切ると、どうしても曲線に角が出てきてしましますが、突き彫りはなめらかな曲線を彫ることができます」

実は、池田さんは父親で先代の稔氏を小学2年生で

※「奈良団扇」は池田含香堂の登録商標

繊細な透かし彫り。よくしなる扇面。美しさと実用性を兼ね備えた奈良団扇



和紙に対して、刃物をほぼ垂直に突き刺して彫っていく「突き彫り」という技法で透かし彫りを行う。点を連続して彫ることで、なめらかな曲線を彫ることができる。ひとつの模様の中で刃物を抜くことは、ご法度。「彫っているときは無心です」と池田さん。刃物のすべりをよくするよう、時折、椿油をつけながら彫る。10枚の長方形の和紙を半分に折り、20枚分約1cmの厚みが突き彫りに最も適した厚みだそう。

亡くしている。池田さんが6代目を継ぐまで池田含香堂を守ったのが、母で伝統工芸士でもある俊美さんだ。「同じ透かし彫りでも、母の彫る線は丸みを帯びた、太目の透かし彫りです。僕の彫る線は細くシャープです。ですから、できあがった奈良団扇の見た目も違ってきます」「こういって、同じ奈良団扇なのに統一しないのか、という声もあるかもしれませんがね。その必要はまったくないと思っています。というの、竹の骨数ひとつとっても、天然の材料をその竹に最適な骨数に割っているのも1本ずつ数が違うんです。和紙も手漉きなので分厚さがそれぞれ微妙に違うし、染め具合も1枚ごとに色の発色が変わります。同じ値段の同じ色の同じ模様の奈良団扇でも、ひとつとして同じものはないんです。見比べて、扇ぎ比べて、お好みのものを選んでいただけるのが、手づくりの奈良団扇の良さだと思っています」

「奈良団扇の形も代々で変わってきているんですよ」と池田さんは続ける。「4代目・5代目の奈良団扇は、やや横長で角ばった形をしていました。僕のつくる奈良団扇は、やや縦長で丸みを帯びた形です。表現が難しいのですが、4代目・5代目の奈良団扇は、“カッコいい団扇”。僕がめざす奈良団扇は“きれいな団扇”。伝統工芸品奈良団扇という大きな太い幹を崩してはいけません。自分がよりよいと考える、新しい枝葉となる作品、商品を常につくり続けていこうと思っています。ずっと修行です」

池田さんは、精巧な透かし彫りを施した新作づくりに力を注ぐ一方で、近隣の学校に出向いてワークショップを行うなど、子どもたちに奈良団扇を知ってもらい活動も続けている。「奈良は知るほどに魅力に気づくまちです。奈良の伝統工芸品に触れ、大人になったとき自分たちの住んでいるまちを誇れる一助になるといいなと思っています」